

17分間の恋



kajioyoy

0時5分発の終電まじかの電車で飛び乗った。

深夜と言うのに朝の通勤時間の込み具合とほぼ同じ込み具合だった。

今日は、月一度の交流会。

いつものメンバーで盛り上がったが、途中から若いOL3人が参加。

一斉に若い連中が群がり、そこだけキャバレー状態になった。

話のテンポが合わず、いつの間にかオジングループの中へ逃げ込んでいく自分が情けなかった。

そんな中、主催者が飛行機の最終便で駆けつけ、やっといつもの会に戻った。

今日は主催者の誕生日とあって、時間延長で主催者の恩恵にすぎり、飲み食いをし、帰路に着いたのは深夜近い時間だった。

発車のメロディが流れ始めると、勢いよく乗客が詰め込んできた。後ろの乗客に押され、座席の前に押し出されてようやく掴んだつり革。ドアがしまる瞬間、ドンと横から押されると、横に立っていた女性の黒髪が顎にぶつかってしまった。

(痛てえ～)

ちょっと、顔を引いてその女性を見下ろすと、前髪の間から大きな瞳をこちらに向けて、ぺこっと頭を下げた。

電車が発車すると、隣同士の密着状態が緩やかになり、多少の余裕が出てきた。

加速するにつれて、先程の女性が横向きになり、

僕も両足を踏ん張り立つ事が出来るようになった。

混んでる時は目線が一番気になるが、取り合えず車窓に目をやった。

すると、何気に見ていた車窓に、自分の姿そしてその隣の女性が映し出されている。

僕はつり革の手で視線が解らないように、じっと車窓に映る女性を見つめた。

ボブカットで背の低い、そして大きな瞳の彼女が鮮明になってきた。

僕は思わず声が出そうになった。

車窓に映る女性は、数年前に亡くなった妻にそっくりだった。

(まさか・・・)

恐る恐る、顔をずらし、少し前かがみになり横目で隣の女性を見た。

ドキッとして、反射的に顔をあげた。

まさしく瓜二つだった。

(そんなはず無い。呑みすぎたせいだ・・・)

そう思ったが、車窓に映る女性は若い頃の妻にそっくりだった。

急に胸の鼓動が早くなったようで、左手を胸の前にだして押さえていた。

やがて、電車は地上に出ると息苦しさも和らいで、少しだけだが気が楽になった。

目の前に座っていた中年の男は、新聞を折りたたむと、周りを見回している。

そして、顔を上げて、隣の女性を見上げていた。

車窓に映る女性は、その顔を上げて目線を逸らしていた。

僕は、横目でその女性をちらりと見る。

黒い前髪が大きな瞳の上で緩いカーブを描き、耳元辺りまでくると、まるで黒い繊維の束のように曲線を描いて顎の下辺りまで伸びている。

鼻筋がとおり、横一文字に結んだ口元にピンクの口紅が妖しく光る。

視線を落とすと、中年男はまだその女性を、虚ろなめで、

眼光だけ鋭く見上げている。

だんだん不愉快になってきた。

気がついたら、僕はその中年男を睨みつけていた。

それに、気づいのか僕を一瞬見ると、視線を落とすような垂れた。

すると、つり革を持つ右手に、彼女の肩の力が抜ける感覚が伝わってきた。

僕は車窓を見つめた。

ほっとした様子で、胸を撫で降りしている彼女。

（もう、大丈夫だ）

僕は心の中で彼女にそう言った。

地下鉄の乗換駅に停車すると、数人の乗客が降りたが、それ以上に乗り込んで来た乗客で、更に込み具合が増した。

また、彼女との距離が数ミリ近くなった。

僕は後ろから迫ってくる人波を、ぐっと踏ん張り彼女に壁になった。

(え？ 大丈夫さ。こんなの容易いものさ。でも、こんなに遅い時間まで仕事だったのか？)

僕の右手が目一杯つり革を引っ張り手首の筋が浮出していた。

やがて、見慣れた街明かりが車窓に現れ、彼女の姿が途切れ途切れになってきた。

”

え？ 仕事じゃないのか。そうか、六本木辺りで飲んできたんだな～)

次の駅で降りるよ。君はどうする？ 降りるのかい？

そうだな。もう遅いからやはり帰った方がいいなあ

明日は、何してる？ 土曜日は休みだろう？

え？そう。友達と買い物か・・・

へえ、原宿へ行くんだ？ 俺？ 行かないよお

何でって？ あそこは若者が多いだろう？ 俺、そんなに若くないもの・・・

表参道じゃない？ 何処？ 青山近く？ いいよ。来週、いや今度の日曜なら暇だし、行けるよ。

うん、わかった。東京駅に10時、OK

”

僕は、車窓の彼女と会話していた。

と言うより、時折ふれる彼女の体の感覚を受け、妻そっくりの隣の女性と、思い出の中で会話していた。

やがて、電車は止まり、別れの時が来た。

コーラから吹き出る泡のように、一気に僕の周辺の乗客は流れ、押し出されるように電車を降りた。

0時22分。正確に電車は着いた。

僕は立ち止まって振り返り、先程の空間を見た。

ぽっかりと空いていた。

その中にあの女性の後姿があった。

(じゃ、また、いつか逢えるといいな。気をつけて帰りなあ～)

僕は、閉じ始めたドアをじっと見つめていた。

ガタンと動き出した時だった。

その女性は振り向いて、ドア越しに僕を見ていた。

そして、ニコリを笑みを浮かべて・・・

{え～？}

電車は、いつものと変わらず暗闇の中を走って行く。

僕はその灯りが見えなくなるまでホームに佇んでいた。

